

「言説の制度論」「記号空間論」ほか
橋爪 大三郎（社会学）

社会学者の端くれとして、棺桶の蓋がしまる前に、言語派社会学という自分の立場の目鼻をつけておきたいと思っている。当面『冒険としての社会科学』の脱稿に集中。それに続けて年内にも『権力論』を書き上げるのが目標。言語ゲームや一般書の執筆に足をとられ、ずいぶん遅れてしまった。来年は、「性空間論」と、そのポピュラーバージョン、「ゲームとしての性愛」を予定。そのあと「言説の制度論Ⅰ・Ⅱ」「記号空間論」と続けば、原理論は一段落する。ここまでは出版社がだいたい決まっている。
ほかに懸案の仕事として、共著の『構造—機能理論』。仏教研究の続きとしては、密教・禅宗・浄土宗・真宗・日

の編集委員なので、そちらの仕事もきちんとやりたい。というわけで手一杯だが、年に数冊ずつ片つけていけば、なんとかなるような気がしている。なお手許に、未発表原稿が、数えてないから判らないけれど五千枚位ある。このほど実費でコピーを頒布するサーヴィスを始めた。「横浜3—50489 橋爪頒布会」宛に二〇〇円振込むと誰でも注文リストが手に入るから、興味ある人はそれを見てほしい。

音楽から見た六〇年代アメリカ社会史
松村 洋（メディア文化論）

五月に『8ビート・シティ』（新曜社）という書き下ろし評論集を出した。ロックという音楽をとおして、時代と社会そして自分自身を見直してみようとした本だ。しかし、音楽大好き人間の内輪だけで通用するような、閉じた話にはしたくなかった。
幸い多くの方々から好意的な評をいただいた。しかし、この評論スタイルに固執せず、一作ごとに、んな視点とスタイルに挑戦し、行きたい。九月には『メディア遊走』（勁草書房）という本を出す。

HK・FMで『アメリカン・フォーク・ミュージック』という番組をやった。そのナレーション原稿を私が書いた。音楽をとおして見たアメリカ社会史といった趣向で、当然その中心は六〇年代だ。公民権運動、ヴェトナム反戦、ヒッピーイズム、ウッドストックなどの話が登場した二時間五〇分の大番組だった。今、その台本が手元にある。かかった曲は全四五曲。キングストーン・トリオの「トム・ドゥーリー」から始まって、ドン・マクリーンの「アメリカン・バイ」で終わる。機会があれば、それらの音楽を語りつつ、アメリカン・シックスティーズを、もう一度、私の身体の中でとらえ直してみたいと思っている。

「きたいテーマ・出したい本」

評論家の川本三郎さんが、『ダカーポ』7月20日号「オーラウンド川本通信」の中で、『8ビート・シティ』に対する「次に『ビートルズとその時代』といったタイトルの、音楽を通して見た六〇年代文化論をぜひ書いてもらいたい」という宿題までいただいていた。このテーマは、なんとかしてみたいと思う。じつは、二年前の五月に、N